

あの目見た
スルクミズを
ボクたちは
憶えて
いない

神楽陽子

挿絵 / 野村輝弥

小説

立ち読み版

第一話

今日のことはボクだけが憶えていない

006

第二話

昨夜のおっぱいが忘れられない

055

第三話

メイドを躰けるSな方法

100

第四話

メイドを反省させるMな方法

164

第五話

結婚を前提に中出しさせて！

202

エピローグ

ご奉仕で又いてもらう贅沢な日々

253

登場人物紹介

Characters



なくも ありさ 南雲 亜理紗

司郎の屋敷で働くメイド。そこそこ裕福な家庭の育ちのため、お嬢様気質。負けず嫌いで、若葉のことを何かとライバル視する。



くにしろ わかば 郁城 若葉

司郎の屋敷で働く、彼の幼馴染み。お姉さんぶろうとするも、どこか抜けた一面も。性格の違いから亜理紗とは衝突しがち。

かいどう しろろ 海棠 司郎

屋敷ではふたりのメイドに世話をしてもらっている資産家の息子。アタマを軽く打ったことで、丸一日分の記憶をなくす。

少年は息を荒らげ、焦ったふうに水泳パンツの紐を解いた。女の子に見せることに少しの躊躇はあったものの、先端に血が巡りすぎて、脱がないことには苦しい。

お姉さんたちよりも年上すぎる毛むくじやらが、雄々しい姿を振りあげる。

「若葉姉と亜理紗が、はあ、エッチな恰好してるせいだよ？」

二段重ねのメイドのおねだりみたいなポーズに悩殺され、自制などできなかつた。

オチンチンは自力で皮を脱ぎ、亀頭を真っ赤に腫れあがらせている。さきつちよで熱いガマン汁が滲むたび、尿漏れの錯覚がするほど。

「ウソでしょ？ シロー、まさか本気で……ちよつと、アリッサはやくどいて！」

「若葉さんが放してくださいさらないと！ いやっ、待って……司郎様！」

少年の意図に勘付いたらしく、若葉も亜理紗も動揺した。しかし慌てるほど相方の動きを制限し、体力の消耗ばかり多くする。

清楚なフリルをまとった肉体は、スクール水着を充分に温もらせていた。メイドの呼吸が乱れているせいか、プールの水が玉の汗の汗の汗のようにも見える。

「待てないよ、ボク……はあつ、もうガマンできない」

これほど勃起を堪えられなくなったのは初めてだ。

昨夜のパイズリを思い出し、悪戯を試してみたくなる。ご主人様は緊張気味にペニスを構え、剥き出しのさきつちよを、メイドたちの隙間へと捻り込んだ。

若葉と亜理紗のスクール水着がデルタ同士で重なり、いかにも窮屈そうな空間を作って

いるのだ。しとど濡れた薄生地が上下で擦れ、こそばゆい。

「何してんのよ？　へ、ヘンタイ！　あつうあ、当たっちゃってる！」

「あ、悪趣味ですわ、こんな遊び……司郎様の品位を、んはあ、疑ってしまいます」

吐息の直後はあからさまに声が上擦っていた。変態や悪趣味と罵ってはくるくせに、彼女たちの肉体はオチンチンを大切そうに挟んでくれる。このような遊びで美唇を緩めるのだから、メイドとしての品位を問うべきかも。

「若葉姉も亜理紗も、はあつ、もつとくつついて！　そうそう！」

ご主人様が命じると、メイド猫たちの抱擁が深くなった。ペニスの存在を意識しているのは間違いない、ちらちらと視線を後ろに投げてくる。

湿ったスクール水着はペニスに痛すぎず、かといって刺激が弱すぎもせず、こそばゆいくらいに擦れた。パイズリほどの柔らかさがなくても、適度な締め付けが心地よい。プレイの卑猥さも興奮に拍車をかける。

「はやく抜きなさいってば、んあふつ、動けないでしょ？」

股間での接触を避けたがり、若葉が腰を無理に捻った。すると亜理紗の身体が不安定に浮きあがり、薄生地をスライドさせる。

「わ、若葉さん？　いきなり動かないでくださいまし」

おかげで肉棒がふたりの縦筋と同時に触れた。ぷりぷりの肉畝が上下で当たり、いやらしい想像を駆り立てる。

(挿れたらすごく気持ちいいんだろな……オマ○コに、ずぶずぶって!)

イメージトレイニングに合わせ、無意識に腰が前後してしまふ。

いかがわしい劣情はペニスに物理的な圧迫感を生じ、本能の昂りをもたらした。嫌がる女の子の初々しい腰つきに、期待と欲求がむらむらと膨らみ、眩暈めまいすら覚える。

「今ならボク、はあ、しちゃえそうだよ」

セックスをしてみたい。女の子の穴に挿れて、ずぼずぼと抜き挿ししてみたい。そんな興味が頭の中をぐるぐるまわり、少年は肉棒とともにふらふらした。

抜き下ろしたくてたまらないのをぎりぎり堪え、片方の処女穴に近づく。

「し、司郎様？ んあはあ、ど、どうかお待ちになって……」

亜理紗が肩越しに振り向き、唇をぱくぱくさせる。

その下で若葉が腫を強張らせた。

「ウソ!? や、やだ! シローのがきてる……ひあつあ、はいつてきてるうううう!」

オチンチンが選んだのは、まったく生えていないほうのオマ○コだ。

挿入が始まってから、亜理紗ではなく若葉に入ったのだと司郎も自覚する。興奮のせいで判別できていなかっただけで、相手が水着姿のメイドであることに違いはない。

水抜き穴に覗ける幼馴染みの清らかな穴にお邪魔してしまう。

ずぶずぶ! ずぶずぶ、ずぶずぶずぶ!

ご主人様は亜理紗のお尻に両手をつけて、若葉の肉穴へと侵入し始めた。スクール水着

に指を立て、刺激の初動に耐える。

肉唇の裏に溜まった愛蜜が雁首に染み、ぞくりとした。

「くっくう？ ココでいいんだよね、はあっ、んああッ！」

「こないでえ！ ばか、ひへえあ？ し、シローにおかされちゃうう！」

メイドの猫撫で声は甘えん坊の調子で、嫌がついているとは思えない。相方の腰にしがみつ き、びしょ濡れのスクール水着を擦れ合わせる。

「は、はれんちですわ……わたくしの前で、んく、このような……」

若葉の上に乗っかる亜理紗は、頬を染め、お尻の位置を決めあぐねていた。しかしどう身じろいだところで、ご主人様の手は届く。

（すごく狭いよ、女の子のつて！）

肉唇の間に割り込むまではよかったものの、膣口は急に狭く、腰が引けそうになった。ここに肉太を打ち込むのは乱暴なのは、と心配になる。

同時に、締め付けへの期待も膨らむ。生殖穴がひくつくたび、オチンチンのさきつちよを一途な吸い付きが出迎えてくれた。

「待ってシロー、ひえあ、こんなところで……んはあああああ！」

身悶える若葉はお姉さんぶっていられない。それでも世話焼きなメイドらしく大胆な開脚で、肉太を案内する。

ご主人様のほうも亜理紗のスクール水着を挿んで、ひと押しごとに踏ん張った。

ぐちゅぐちゅっ！ ずぶずぶぶっ！

膣穴が最小限に拡がり、ペニスを半ばまで呑み込む。こちらの快樂神経に熱いエキスを染み渡らせながら、ぬめった締め付けで包んでくる。

若葉と司郎の下半身が密着するのを、もうひとりのお尻が妨げた。

「司郎様？ いけませんわ、すぐに、っあふあ、おやめになつて」

「お、押さないでよ、亜理紗！ はあ、外れちゃうから」

亜理紗のヒップアタックが不意打ちとなり、結合部のベクトル関係をずらす。

外されまいと前進した拍子に、勢いがつきすぎてしまった。

みちみち！ ぶちっ、ぶちぶち！

処女の窄まりが根元まで届くとともに、若葉が悲痛にしゃくりあげる。

「あいついい、ひぎいいいいッ!! ……あたひ、あたしのが、いま、シローに……」

それきり唇が閉まらなくなり、息遣いに疲労の色も濃くなった。

司郎が奪ってしまったらしい。

「はあ、あ……あつたかいよ、若葉姉のなか！」

処女を台無しにした罪悪感と、それを果たした感動が一緒くたに込みあげてくる。

膣圧は奥に向かつてうねりつつ、味見するみたいにペニスに愛液を吐きかけていた。卑

猥な液の感触が性的興奮をいっそう熱くする。

やっと会話できるくらいに息を整えた幼馴染みのお姉さんは、やっぱり生意気。

「か、勘違いしないでよ？ んはあつ、あ、あたしが奪われたんじゃないよ、くふう、若葉お姉ちゃんがアンタの、奪ってあげたんだからっ」

おかげで、強情な彼女を貫いている実感も強かった。胸が高鳴り、単なる性欲だけではない想いを自覚させる。

怒張は痺れついてしまって、しばらく感覚が働きそうにない。

「亜理紗もほら、はふう、ボクたちと一緒に」

「ち、ちよつと？ 司郎様、ああん、何をなさるの？」

そこでご主人様は、もう一匹のネコ耳メイドにも愛撫を這わせた。もどかしい手つきでスクール水着を撫で、好物の膨らみを探す。

肩紐を広げるように引っ張るだけで、たわわな乳果はつるんと剥けた。スクール水着の紺色を粹にして、艶めかしい白さを際立てている。桜色のワンポイントも可愛い。

「ひはっんあ、触らないでくださいまし……ひあつ、そこは敏感ですよ！」

少年の手は背後からロングヘアをすり抜け、巨乳を捕獲した。濡れた肌は火照り、プールの水気よりも汗の気が強い。蒸れた牝の甘酸っぱいにおいも濃くなる。

重ささえ柔らかさとする肉釣り鐘を押し揉むと、亜理紗の唇が切ない喘ぎを刻んだ。

「イタズラが過ぎますわ、あつ、んあ？ く、くりくりしちゃだめ！」

若葉の上でのけぞり、肩をわななかせる。特に乳突起を弄られるのが弱いらしく、下唇を噛み、悔しさと恥ずかしさで涙ぐむ。いつも気丈で強情な分、年下の男の子に辱められ

るのは我慢ならぬのだろう。

「な、何よ？ アリッサ、んはあ、フンイキ作っちゃって……」

睦まじいおっぱい遊びを見せ付けられ、若葉はむくれていた。ぎこちなく脚を広げ、ただ生えていない肉穴を一生懸命に潤わせる。

「そういうつもりでは……だ、だったら、若葉さんも剥いてやりますわ」

「アリッサ？ やめてったら、あつあう？ 加減してえ！」

ご主人様に巨乳を抱かれつつ、亜理紗はメイド仲間のスクール水着に手をかけた。少年よりも鮮やかな手つきで生乳を暴き、強引に揉みしだく。

特大の餅を捏ねるみたいで容赦がない。

二匹のメイド猫は揉みくちやになって悶え、吐息をハモらせた。発情期の肉体はプールの水ごと温もり、もったいぶった腰つきがもどかしい。

「ボクを除け者にしないでよ、はあ、おっぱい気持ちいい」

女の子同士のスキンシップにご主人様も割り込んで、汗ばんだ巨乳をべたべたと触りまくる。スクール水着のおかげで引つ張り寄せるのが簡単だ。薄生地は柔肌を満遍なく濡らしつつ、うら若い牝のにおいを蓄えてもいる。

さらに少年は亜理紗のうなじにキスを押し付け、舌をのたくらせた。

「んあぶつ、女の子って美味しいよ、あむ……はあ、へんな気分になっちゃう」

「ケダモノですわよ、こんなのつ、ああん？ あつだめ、くすぐりたい」

高飛車なメイドに對しても独占欲が込みあげてくる。鼓動のペースが跳ねあがり、もう抑えてなどいられない。

「こらあ、シロー？ アリッサとイチャイチャしてないで、こ、これ抜いて……！」

同時に股間ではオチンチンをくすぐられた。若葉の可愛い嫉妬が、健気な締め付けから伝わってくる。そろそろペニスの感覚も戻ってきたところだ。

「じゃあ今度は若葉姉と……くっ、んはあう！」

ご主人様は垂理紗のお尻に再び掴まり、若葉のオマ○コを躑け始めた。エラ張った獣の形をゆっくりと引き戻すたび、甘い痺れから逃れられずに苦悶させられる。

ぬちゅぬちゅ！ ぐちゃっ、ぬちゅ！

摩擦そのものが微弱な電流を伴い、剥き出しの快楽神経を焼く。

「えひあぁ？ うごいてるっ、シローのちんぽ、あぁは！ うごいてるう！」

メイドも息を荒らげて悩乱し、ネコ耳で青空を仰いだ。おしめを換えられる赤ん坊みたいなポーズで、両脚を引き攣らせる。

膣は狭苦しく、肉棒に血が巡るだけでやっとなつた。サオはまだしも、裸の亀頭を直接撫でられるのがたまらない。前の痺れを振り切れないうちに次の痺れに襲われる。

（このなか、気持ちいいのがたくさんあるぞ？）

刺激の数を増やしているのがヒダヒダだ。感じやすい肉棒にまとわりつき、煮えた液を絡めてくる。苛烈な締め付けと優しいいくすぐりが同時に来て、射精への意欲を促す。

息をつもりでスクール水着を握り締めると、亜理紗のお尻が浮いた。

「食い込んじやいますわ、あふあ、乱暴になさらないで」

ネコの尻尾を振り、愛玩動物ならではの魅力を引き立てる。発情期の肉体はご主人様の愛撫にとても素直で、抵抗が抵抗になつていない。

同じくらい素直な下半身を持つ若葉も、拒絶とはいえない甘い声色で鳴いた。

「ああんっ！ シローのばか、ひあつくふ！ あとでぜったひ、なかしてやるから！」

スクール水着の股底は水浸しだ。亜理紗の穴からも液が垂れ、若葉の牝穴をなみなみと潤す。おかげで男の子の性毛と玉袋までぐっしよりと濡れ、生の体温が伝わってくる。

「びちよびちよだよ、はあっ、若葉姉の！ すぐくやらしい！」

健康的な汗を流しながら、少年はオチンチンの運動に励んだ。サオの太さで二枚の肉唇を引きずり出しては、挿入のコースに押し戻す。

すると雁首の位置に留まっていた拡張感が下りてきて、ペニスを丸呑みに。

ぬちゅぐちやつ！ ぬちやつ、ずちやつ！

たった一回の抜き挿しでも心臓が暴れ、呼吸のリズムが狂った。痺れすぎた肉棒に熱いガマン汁が通るたび、暴発しそうになつて慌てる。

(セックスつて激しすぎるよ！)

雄々しい勃起は温かい粘膜襞をかき混ぜ、若葉の発情汁を染み渡らせた。網の中で魚がもぐもぐ動くように動きで、射精の時を待ち侘びてのたうつ。



おあずけの亜理紗は順番待ちの間から唇を開き、牡の味を欲している。口の中には喪失感があるらしく、人差し指を甘く噛むほど。

ライバルが息継ぎに入ったら、ずぶ濡れの唇を突進させてくる。

ぢゅるるるっ！ ぢゅぱっ、ぢゅっずず、ずちゅ！

亜理紗のフェラチオは舌の動きが細かく、むず痒い鈴口を集中的に穿った。

「わかばさんのお、見てへ、あおも、わかりまひたわ。こおやつへ、れ、れしよう？」

唇の締め付けも格段によくになり、雁首をちゅうつと吸いあげられる。お嬢様育ちであるにもかかわらず、呼吸のために小鼻をスンスンと鳴らす有様。

口奉仕のせいでフェイスラインを歪めていても、上目遣いは一途だった。

愛情とない交ぜの劣情をそそられ、亜理紗のネコ耳を舐戻するみたいに撫でてやる。

「はあっ！ 亜理紗も上手だよ、うあっあ、さきつちよばかりされたらッ！」

舌のうねりに強い痺れを感じ、腰が勝手に跳ねるのを食い止められなかった。堪え性のないオチンチンがガマン汁を先走らせ、尿道を熱く潤す。

隣で待つだけの若葉には落ち着きがなかった。

「おくちのなか、ヘンな味してる……んあふ、こんなに舐めるつもりなかったのに」

フェラチオに否定的なのはポーズだけ。今のうちから自分の指で、股まで丁寧舐めて練習する。そして自分の番がきたら、どろりと食欲旺盛な涎を舌とともに滴らせる。

「ちよっと、まだわたくしですよ？ あふ、イヤならじっとしていらして」

「し、仕方なくやつへるだけ、あおうぐつ、なんだから」

強要されてと言ったところで、舌が雁首ともつれていては説得力がない。つぶらな瞳はご主人様を熱っぽく見詰め、妖艶な目つきになりつつあった。

交代々々に唇で磨かれ、肉棒がぬめ光る。チンカスは少しも残っていない。

「ケンカしてないで、一緒にやってごらん。はあ、ペロペロするところ、よく見せてよ」

ご主人様がカメラを構えなおして待つと、二匹のメイド猫は頷きあつて、タイミングを完璧に揃えた。独り占めして啜えることはせず、裸の亀頭へと同時に舌を這わせる。

「してあげるから、カメラはもういいでしょ？ んあえは、はっあえ」

「わかりませんか？ 記念撮影ですわ、わたくしの……れあ、ふぁーすときすの」

比較的従順な亜理紗も撮影には露骨に動揺しており、頬が赤い。それでも若葉には負けられないと、一生懸命に舌をのたくらせていた。

若葉も横目でカメラの位置を確認しつつ、唇を休ませない。亜理紗より鼻を近づけ、牡の性器臭を嗅ごうとする。

赤腫れた亀頭は二枚の舌で挟まれ、念入りに擦られた。

「いいぞつ、はあ、その調子……ふう、もつとしゃぶって、反省するんだ」

偉い立場のご主人様は喘ぎを抑えきれない。剥き出しの性感帯を舌で弾かれると、尿でも漏らしかねない痺れに脊髄を打たれてしまう。性的興奮で息が上がるほど。

どちらも雁太に唾液を塗り固めるような動きで、頻繁に糸を引いた。年上のメイドたち

が年甲斐もなく飴で遊んでいるようにも見え、あどけない。

「んれえあ……あはあ、びんびんですわ、ご主人様の、かはくつて、んつあむ」

「スケベなことばかり、はあぐ、考えてるから、ン、こおなるんでしょ？」

ヘッドドレスとネコ耳は、さながらベビーキャップといったところ。

（さすがすぎるよ！ フェラチオって）

しかし幼いばかりでなく、アダルトイックな牝の表情もさまになってきた。心地よい微熱にうなされるような顔つきで、フェラチオの光景を淫靡に盛りあげる。司郎の股間より下にはフリルが集まり、くすぐつたい。

カメラは無遠慮にメイドの、ふくよかな胸の谷間を覗き込んだ。

「たままないよ、ふたりとも……はあ、すごくエッチで」

撮られている自覚があるらしく、若葉も垂理紗も一緒に身じろぐ。けれども後ろにお尻を突き出すくらいの抵抗が精一杯だ。鈴付きの尻尾がびこびこ動く。

ぢゅつぢゅる、ちゅぱ！ ちゅぱつ、ぢゅぢゅ！ ずずちゅ！

涎は巨乳へと滴り、柔肌を誘惑的に照り返らせた。フェラチオが激しくなるにつれ、襟元の鈴も暴れまわる。

「なんかさきつちよから、へあつ、にがいの出てるわよ？ ……せええき？」

若葉がカウパアの味に気付き、色っぽい吐息を吐いた。牝のにおいが相当まわっているようで、もうほとんど男性器を嫌悪しない。

「違いますわ、若葉さん……あうはあ、これはガマンじる、ですの」

生徒会長だけあって博学な亜理紗もとば口を舌で撫でる。

こちらからも唇にアプローチしたくて、少年は亜理紗の小顔だけを見下ろした。もう躊躇せず、お仕置きをどんどんエスカレートさせていく。

「そのままっ！ 亜理紗、おくち開けてて……ッはああ、んううううう！」

ゆっくりと肉棒を押し込んでやると、雁首まで嵌まったタイミングで唇が窄まった。さすが優等生の判断力だ。恥ずかしそうに紅潮しつつ、舌をぬるっとうねらせる。

「ごほうしはメイドの、あうっちゅ、よろこびれすわ。こうしゆることがわたくしの、えはああ、おひごと、なんれすの」

口の中には高温の吐息が溜まり、唾液もお風呂の適温くらいに温もっていた。締まりのよい唇が液を引きずり、亀頭の付け根を磨く。

ぢゅぷぷっ！ ぢゅぱっ、ぢゅぶぢゅぱ！ ぢゅぶっ！

チンポ臭の直撃を食らって涙ぐんでも、唇を離そうとしない。

「アリッサにばかり、ずるい……ご、ご主人さま？ んはあ、あつ、あたしだつて」

嫌がっていたはずの若葉もとうとう本性を晒した。カウパアの味が浮いた唾液を舌に溜め、モノ欲しそうに少年を見上げる。

「さては若葉姉、オチンチン美味しいとか思ってる？」

「お、美味しいわけ！ ないけど、その……アンタが喜んでくれるなら、とか」

普段は言葉にしないようなことを暴露的に囁き、顔をかあつと赤らめる。

計算で媚を売れるほど器用な女の子ではない。若葉の綻ばせた純情さに惹かれ、ご主人様は亜理紗のパキウムから何とか脱した。

「ご主人様あ、あふつ、わたくしがして差しあげて、はあ、ましたのに」

お嬢様の美唇が名残惜しそうにサオを横から優しく噛む。その吸い付きがよく、肉棒を引き抜いてしまったことを後悔するほどだ。液まみれの先端はむず痒く、刺激が二、三秒途切れただけで煩悶とさせられる。

堪え性のない怒張がガマン汁をびゅつと噴いた。

「若葉姉のフェラ顔も撮ってあげるよ。ほら、アーンして」

カメラで捉えられた唇が震えながら拡がり、ピンク色の舌を覗かせる。そして亀頭を頬張ったら、歯を立てないように窄まり、温かい窮屈さを生み出す。

「んううふつ、あむちゅ、んぐ！ こお？ あおつろ、お、おつきしゅぎれ」

若葉は雄々しい勃起をもぐもぐと吸いあげ、その肥大さに可愛い舌をもつれさせた。カメラ目線の上目遣いで、少年の苦悶ぶりを確認する。

「気持ちいい……あつ、出ちやう！ もう出ちやいそうだぞ！」

股間では熱量がどんどん膨張し、物理的な圧迫感を生じた。神経が焼き切れそうな痺れに肉太が根からのたうつ。

片方の唇が外れると、もう片方の唇が急行してくれた。

「ぷはっあ、はあ、ぶっとしゆぎて続けらんない……んあ、おくちが疲れてきて」

「なら、続きはわたくしですわ？ あうおむっ、んっちゅ！ うおあむ！」

若葉に続いて亜理紗がピンピンの亀頭を頬張り、ぬるぬるの舌を旋回させる。涎の量も夥しくなり、巨乳に垂れてしまう。

亜理紗の唇が休憩に入ったら、再び若葉の唇へ。

「あおお、おっうぐ……ンッ、もおイツひやいなはいよ、えあえ、ごしゆじんはまつ」

「どおぞ？ うけとめへ、あはう、さしあげますわっ、あえんぐ！ えぶあつ！」

メイドたちは見事な連携で唇を入れ替え、食欲旺盛なキスを降らせた。ご主人様の硬いオチンチンを美味しそうにしやぶり、唾液の泡を噴く。

ぢゅぶっ、ずぢゅ！ ずずっ、ぢゅば！

恥ずかしがって頬を赤らめる、多感な表情が心にくい。きついチンポ臭に涙を滲ませても、フェラチオ奉仕を自分の意思ではとめられないかのようなようである。

「いいよ、ふたりとも！ はあっ、満点のおしやぶりだよ！」

ご主人様は二匹の可愛いペットを、上から覗き込むアングルで撮影した。口奉仕や胸の谷間ばかりでなく、落ち着きのない尻尾もじっくりと眺める。

男の子の身体は汗だくで、とりわけ股間を蒸らしていた。いやらしさを伴った刺激に龟头を包まれるたび、甘い痺れに脚の付け根を撫でられる。

「おおあぐ、あ、あたひ……ヘンになっへる、ちんぼのくはひ、んふ、においれえ」

ご奉仕によつてメイドの立場をわきまえたか、若葉はしおらしく跪き、ペニスを丹念にしゃぶりあげた。雁太を啜え、舌で大小の円を描く摩擦が上手い。

「んあはあ……ご主人様の、このにおい……あむう、ぽーっへ、なりましゅわ」

亜理紗もお嬢様育ちが嘘であるかのように涎をぶらさげ、肉棒にしゃぶりつく。こちらのメイドは唇で締め付けを作るのが得意だ。

ふたりの乞うようなまなざしは男心をくすぐり、同時に劣情をそそつた。

「よしよし、はあ、いい子だぞ。もつとチンポに尽くすんだ」

フェラチオ奉仕が盛り上がるほど、ご主人様としての自信も大きくなり、物言いが偉くなつてしまう。節操なしの肉棒はふたりの唇で堂々と浮気を繰り返す。

亜理紗の唇が前後に動き、マウスピストンをうねらせた。

「びくびくふなさっへ、ますわよ？ はあぶっ、こお、れしよう？ ンはぢゅ」

麗しいストレートヘアを波打たせながら、淫らなキスを深める。せつかくの奥ゆかしい容姿も、唇が涎まみれでは台無しだ。サオの根元で立てた小指もぬめ光っていた。

若葉も快活なおさげを引き連れ、ストロークに挑む。

「しぶといちんぽ、ね……んあぐっ、まだなの？ やへガマンしてないれ、あおむ、だしなはいつたら、ね？」

唾液のおかげで唇がよく滑り、テンポよく摩擦を往復させる。

肉棒はさきつちよを真つ赤に興奮させ、メイドたちとのキスに溺れた。甘い痺れが股間

にこそばゆく群がり、脊髄を打つ。

「もっもう出る！ 出ちやうよ、はあっうあ、はあ！」

ご主人様は発作を起こし、ペニスに力いっぱいしの疼きを漲らせた。

それを慰めるべく、ふたりのメイドが一緒になつて雁太を優しく包み込む。

「すごいエッチなカオ、あふつ、してるわよ？ えれああ、ろお、これでいいの？」

「びゅーって、なさって？ そのための……ッああぐ、ごほおし、れすもの」

涙混じりの瞳を細め、少年の雄々しさに見惚れるような目つきが惱ましい。潤いすぎた唇はだらしなく拡がり、舌が摩擦の回数を競っていた。若葉の唇は亀頭の丸みを、亜理紗の唇は雁首の括れを集中攻撃。

ぢゅっぢゅる！ ぢゅぷっ、ぢゅぱ！ ぢゅっぢゅぢゅ！

跪く肉体も弾むほどのマウスピストンで、猥音を鳴らしまくる。

少年は舌二枚分の催促みたいなうねりに悶絶し、全身で汗を流した。股間の熱量が尿道へと届き、とば口に達しそうになる。両脚を伸び切らせても数秒しか堪えられない。

「はあはあっ！ はあ！ 出すよ、ああっああああ！」

ふたりのメイドが雁太に鼻を押し付けた瞬間を狙ったように、汚濁が噴きあがった。

どびゅっ！ びゅびゅっ、びゅ！ びゅるるる！ びゅるびゅる！

熱い快感がペニスをとるところに溶かす。強い痺れからの開放感に酔いしれ、ご主人様には涎を垂れている自覚もない。

白濁汁はメイド猫たちの真正面で飛び散り、強烈な精液臭をばらまいた。

「ひゃふううううッ!? な、なにこれ、あんっ、いきなり?」

「んえっえひあ? とてもたくさん……ぷは、れ、出てますわ」

それぞれ可愛い悲鳴をあげて、ご主人様の濃さを浴びる。唇の中にも放たれ、舌まで白濁を滴らせる有様だ。しかし嫌悪感も微塵も見せず、瞳をうっとりとなんか笑ませる。

「出るっ! はあ、うああ! はああああ……!」

男の子は頭に熱を浮かせたように酩酊し、甘美な放精感を堪能した。

びゅっびゅる! びゅくっ、びゅくびゅく!

下半身を病的に打ち震わせながら、尿道に残った液も押し出す。女の子の顔にぶちまけているのに、遠慮のブレーキが利かない。

若葉と亜理紗はネコ耳ごと仰向いて、生臭いスペルマの雫を首筋まで伝わらせた。

「お、おおすぎ……オフロでしてあげた時より、んあ、すごいかも」

「あつくて、くふ、くさひですわ……これがご主人様の、ほんとうのにおい……」

額や頬にぬめりを残し、噎せる異臭に涙ぐむ。それでもふたりは跪いたまま、酔った表情でカメラを見上げていた。これで口奉仕は終わり、という理解がまだらしく、呆然としたままである。発情期の行動に自覚はないのかも。

(わわっ! お掃除フェラまで?)

命令されることなしにメイドたちは勃起に粘りつくジェルを舐め、唇へと回収した。透



明の唾液だけを満遍なく残し、綺麗に仕上げてくれる。

「やだ、あたし……んちゅつ、まだふえらちお、しちやつてるう」

若葉は汚れた舌を見せびらかし、自身の息遣いに悶えた。さすがに汚い精液を飲むことはできないようで、汗ばんだ生乳に垂れ流す。

「ごしゅじんさまの、えはあ、あじ……ひあふ、ニオイがすごすぎますわ」

亜理紗は飲もうとするものの、唇の両端からほとんど零してしまった。こちらのメイドも白い巨乳をぬめ光らせて、もどかしそうに身じろぐ。

ようやく司郎は爪先立っていた足を下ろし、呼吸を落ち着かせた。

「はあ、はあ……最高のご奉仕だったよ」

依然としてペニスは勃起しているが、しばらくは感覚がともに働きそうにない。それに彼女たちも満足させてやらなければならぬ義務がある。

ご主人様はカメラを構えなおし、ふたりのスクール水着をねめつけた。薄生地に入りきらない太腿の光沢からして、肌がべつとりと汗ばんでいるのは明らか。

「や、やですわ、ご主人様？ あはあ、まだ撮影なさるの？」

「ほんとスケベなんだから。昔はそうでも、んく、なかったのに」

メイドたちは互いに寄り添い、生乳をくっつけあった。撮影されまいとする抵抗のようだが、かえって乳果の柔らかさをアピールしてしまっている。

柳腰をくねらせる動きも不自然に多い。

「じゃあ次は、立って、お尻をこっちに向けてごらん」

少年は獣の呼吸を忍ばせつつ、淡々と命令した。

「か、かしこまりましたわ……ご主人様、あの、これでよろしいのですの？」

亜理紗が身体の向きを変えて立ちあがり、窓際の手すりに掴まる。悔しがりつつ、若葉も罰として起立せざるを得ない。

「もうお仕置きは済んだでしょ？ あたしだって反省、してるのよ？ ご主人さま」

「まだまだ。ちゃんと反省してるかどうかは、ボクが決めるんだ」

後ろから見て、右に若葉のお尻が、左に亜理紗のお尻がおずおずと並んだ。鈴を鳴らす尻尾が小粋で可愛い。

紺色のスクール水着がきつく食い込み、お尻の曲線を引き締めている。薄生地越しにも張りがあって美しく、すらりと長い脚もカメラ映えした。

水着のローレグから食み出す太腿は随分と内気に閉じ合わさっている。

ふたりともご主人様の悪戯を警戒し、顔をこちらに向けていた。華奢な肩で髪をのけ、牝の肉体を女の表情で恥ずかしがる。

少年は一旦カメラを置き、例のプレゼントを開封した。

少々値の張る万年筆だ。中指ほどの太さがあり、漆のごとく黒光りする。

「ふたりのためにせっかく用意してたのに、これでケンカするんだもん。どうして素直に受け取ってくれなかったのかな？」

「やっぱりハードですわ、んふう、ごっ、ご主人様のお仕置き！ えはいいつ！」
 「やらしいキスしないで……へああ？ や、やだ、そんなに吸っちゃ！」

発情期のメイド猫は二匹とも、電線にでも絡まったみたいに痺れを起こした。胸元の鈴をチリンと鳴らし、肉体の震えを報せてくれる。

清楚なフリルに紛れて肉体は昂り、感度をどんどん高めていた。男の子を本能的に狂わせる芳しいにおいを放ち、悩ましい喘ぎ声で誘ってくる。

「ふたりとも、はあ、今夜もエッチすぎるぞ？ 目が覚めちゃったじゃないか」

ご主人様はクンニを切りあげ、両方の牝穴を指でかき混ぜた。

ぬちゅちゅ！ ぬちゅつ、ぬちゅぬちゅ！

むしろ秘裂のほうが少年の指をしゃぶり、濁った涎をスクール水着に伝わらせる。

「ほんとに敏感なのっ！ つひはあ、カラダが……あん、しびれへ！」

喘ぐあまり若葉はおさげを振りまわし、舌をもつれさせた。火照った太腿に玉の恥汗を浮かべ、ありのままのラインを淫靡に照り返らせる。

「どうしてそんなに、あはあん、上手なの？ おお、おつゆがとまりませんの！」

亜理紗も快感を誤魔化すようにかぶりを振り、ストレートヘアの金色をちりばめた。慎ましやかな唇をだらんと拡げ、少しでも多くの酸素を取り込む。

どちらの生殖穴もスクール水着ごとびちよびちよだ。形がわかりやすいクリトリスを集中的に擦ると、まとりつく肉唇が淫液を吐き出す。

お仕置きプレイで調子もあがってきた。

「こんなスケベなメイドさん、屋敷にいたかな？ そろそろ正体を暴かないと」
滴るほど液に濡れた手で、彼女らのアイマスクをひとつずつ外してしまう。

メイドたちの小顔は真っ赤な恥じらいで満たされていた。

「あ、あたしがスケベってわけじゃ、んはあ、ないんだから……」

「ご主人様の、ああふつ、指遣いが、とてもいやらしいからですわ」

司郎より年上だから、普段は気を張っている表情なのだろう。しかし年上ならではの気丈さをひっぺ返してやると、意外にあどけない顔つきが残る。

つぶらな瞳は涙ぐみ、今にも鼻をすすりそうだ。反抗的な若葉は顔を横に向けながら、従順な亜理紗は俯きがちに、ご主人様を見上げる。

泣き顔寸前の、許しを乞うようなまなざしに、後ろめたい罪悪感が込みあげた。

(若葉も亜理紗も可愛いカオしちゃって！)

同時に衝動じみた劣情も禁じえない。いくら恥ずかしかったところで幼馴染みのカラダは淫らに感じてしまうのを、少年はよく知っている。

スクール水着から指をぬると引く抜くと、メイドたちの腰つきはむしろもどかしそうになった。三角座りを後ろに傾ける危なっかしいバランスで、息も乱れたまま。

「はあっ、んあ……急にとめられたら、だめ、おかしくなっちゃう……！」

「もうおしまい、ですわよね？ ひへあ……べっ、別に欲しがっているわけでは、ありま

せんことよ？ わたくしが、はあ、そんなはず」

どうやらオナニーを始めてしまいたいらしく、股布へと手を近づけていく。だが男の子の前で自慰など割り切れず、震えるだけだった。

彼女たちが身動きできないうちに、少年は一旦ベッドを下りる。いずれ使う日のため、とっておきの玩具をベッドの下に隠しておいたのだ。

「取り寄せてすぐ使うことになるなんて思わなかったよ」

それは電動バイブ。嵌めたままでも電池交換ができる、愉快的な玩具である。

見るからに卑猥な形をしているため、ふたりとも一目で理解したらしい。若葉は頬を赤らめ、男の子の悪趣味をなじった。

「バイブなんて、い、いつの間にも買ったの？」

亜理紗は太腿によるガード姿勢を固くし、玩具遊びを拒否する。

「無理ですわ！ わたくしは、そのっ……まだ処女ですもの」

しかし少年の獣欲にはとづくに火がついてしまっていた。二匹のメス猫をいやらしい目的と手段で可愛がってやらないことには、性的興奮が鎮まりそうにない。

まずは若葉のほうへ迫り、フリルの束に手を突っ込む。

「しっ、シロー？ あん、水着引っ張っちゃだめ」

スクール水着のレッグホールを股間に向けて広げると、無毛の恥部が現れた。ただし今夜は処女の亜理紗に合わせるべく、前の穴は狙わない。

尻穴の窄まりを探し、そこにパイプを当てる。

「う……ウソでしょ？ そっちははいんないってば、むっ、むりむり！」
恥ずかしがり屋のお姉さんが涙を溜めた。

その一方で肉体は肛門をひくひくさせ、小さな存在感をアピールする。

「こないだはオチンチンが入ったし、若葉姉のあなるはたぶん……ほら、拡がるから」
穴の周囲には小皺が集まり、菊の形に綻んでいた。パイプを押し込むと、日常的にモノを留めていられるのが信じられないほど、すんなり挿入できてしまう。

ずぶずぶずぶうっ！

「ひはああああああ!! はいってる、ばいぶ、やだ、はいっちゃってるう！」

若葉はネコ耳をべたんと傾け、パイプ遊びに苦悶した。抵抗の言葉は続かず、肛門拡張の内容を吐露する始末だ。切ない表情も、拒絶から享受のものへと意味を変えていく。

隣で見守る亜理紗は目を逸らすこともできず、息を呑んだ。

「や、やですわ……どうしてそんなに、簡単にはいりますの？」

若葉のアナルは見た目にもよく拡がり、パイプをぐいぐい引っ張ってくる。司郎の手が放れたら丸ごと呑み込んでしまいかねない。

「ほんとエッチなおシリだよ。こっちでオナニーしてるんじゃないの？」

「ばか、誰がそんなこと……んあふっ？ おお、オシリのあながびくびくって！」
生意気に振る舞ってもいられないメイドは、お尻を刺激しないように姿勢を変えた。猫

がオシッコするようなポーズで、伸ばした片脚に痺れを漲らせ、バイブを浮かせる。

次は亜理紗の番だ。少年のすっかり器用になった手先が、スクール水着の股布を捲り、お嬢様育ちの裏門を暴く。

「きゃあつ！ お、お待ちになつて？ ご主人様」

そこには金色の性毛が生え揃つており、排泄器官にもかかわらず品格があつた。お高くとまった穴は狭く、バイブの太さでは簡単に通れない。

しかし先日は極太の勃起が入つたのだから、入るはずだ。

「もつとりラックスして、亜理紗。オチンチンがはいるのを想像するんだ」

「押し込まないで、ひはっあ、いい？ んいいいいいッ！」

亜理紗が息を大きく吸い込んだ拍子に少し緩んで、どうにかバイブの先端を咥えさせることに成功する。あとは吸引力が働き、尻穴のほうが異物を連れ込んでいく。

肛門開発が深まるにつれ、メイドの顔つきもはしたなくなつた。強気な眉の形を支えることができず、唇の端から涎をだらり。瞳も艶で満たされる。

「わたくしまで、は、はいってしまふなんて……えひあ、オシリが熱いですわ……！」

バイブを固定されると、亜理紗も猫のポーズで背中を伸びあがらせた。バランスを取るのが難しいらしく、「前足」でシートをしっかりと掴む。そして若葉と左右対称に「後ろ足」を片方だけ浮かせて、肛門に体重が掛からないようにする。

ふたりともその姿勢を維持するだけで精一杯だ。宙に伸びたほうの美脚が引き攣り、体

力を少しずつ消耗させる。

「じっとしてゐるんだぞ、ふたりとも」

続いて少年は油性の黒マジックを持ち出した。若葉と亜理紗のゼッケンに、大きな文字で「精液便所」などと書き込んでしまう。

「やだ、あたし……アンタのトイレなんかじゃないのに」

「け、軽蔑しますわ？ こんな発想……女性が、せええきべん、だなんて……」

ご主人様専用の便器となったメイドたちは、悔しさと恥ずかしさを露骨に浮かべた。しかしパイプのせいで反抗はせず、せいぜい唇を噛むだけ。

「まだまだ。パイプはこんなものじゃないぞ？」

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴ！

パイプのスイッチがオンになると、若葉の尻穴も亜理紗の尻穴も、いきなり激しい振動で荒らされまくる。メイドたちの腰は躍るように跳ね、全身のフリルを揺すった。

「あひっいいい、んああ？ とつとめて、これ、とめなはひってばあ！」

拒絶になっていない甘ったるい声色で、若葉が悦がる。悪戯少年を睨もうとはするものの、眉根にほとんど力が入っていない。亜理紗も髪を振り乱して悩乱した。振動するとは知らなかったらしく、困った表情で股間を見下ろす。

「ど、どうなってますの？ ぶるぶるって動いて、えっんく、はううううう！」

パイプの刺激は確実に効いており、メイドの腰つきには落ち着きがなかった。シーツを

握り締め、巨乳を運ぶように身体を大きく弾ませる。

「ついでに記念撮影もしとこっか」

さらにご主人様は若葉が持つてきたカメラを構え、みつともない猫のポーズをしげしげと眺めた。必要以上にレンズを近づけ、スクール水着のラインをなぞる。

ゼッケンの「精液便所」も忘れずに。

姿勢のつらさもあってメイドたちは身動きできず、バイブに耐えるだけで精一杯だ。

「また撮るの？ こないだだって、はあ、あんなに……ひはっあうああ！」

「撮らないでくださいまし、ああん！ 惨めなわたくしを、くふ、撮らないでえ？」

アイマスクのなくなった素顔は紅潮し、女の羞恥と牝の快楽を一緒くたにしていた。呼吸の激しさと胸元の鈴を鳴らしながら、双乳の谷間へと涎を滴らせる。

フリルで囲われたスクール水着は、股脇から液を漏れ、バイブまで濡らした。

薄生地デルタはプールにでも浸たしてきたかのような色合いで、健康的な太腿も潤沢が艶めかしい。柔肌の甘いにおいを漂わせ、男の子の獣欲をそそる。

「ふたりとも、はあ、オチンチンのお世話もしてよ」

少年は自慢のペニスを前に出し、疼きを漲らせた。刺激がないと狂おしくて、手っ取り早く扱き下ろしたい衝動に駆られる。ショーツやブラジャーの着け心地も変態行為を強烈に自覚させ、こそばゆい。

「ほら、さつき足でやってたやつ。あれで気持ちよくして欲しいな」

メイドたちは男の子の雄々しい形を見詰め、こくりと咽を鳴らした。

若葉のほうから先に爪先を伸ばし、オチンチンにタイツを擦りつけてくる。パイプの振動に耐えながら、足の指を折り曲げ、サオを上下に拙く扱く。

「んはあつ、これでいいんでしょ？ 出させてあげるから、も、もお許して？」
亜理紗の爪先も近づき、亀頭へと這いあがってきた。

「誠心誠意、心を尽くしますわ。ですから、んあつは、わたくしのことも」
とば口に浮いたガマン汁を拾いあげ、タイツを湿らせていく。

意地悪なパイプのせいで、反抗する余裕など一欠片もないようだ。お仕置きではご主人様に敵わないと思いつたことだろう。

「もつとなでなでして……はあつ！ ふたりとも上手だよ」

さつきとそう変わらないプレイのはずだが、立場は逆転していた。

オチンチンを踏みつけられたり、蹴りつけられたりといった被虐感はあるのに、マゾの快楽に打ち震えるのはメイドたちのほうである。

「こうやって扱いてあげたら、あうつく、出るのよね？ んうふ！」

羞恥で涙ぐむ若葉が、「これでいいの？」と健気なまなざしで問いかけてくる。その爪先は足の親指だけ器用に立て、雁首を摘むように撫でてくれた。

パイプに戸惑っている亜理紗も、オチンチンへの一途さでは負けていない。足とは思えない上品な指の運びで、脈搏を読む。

「いつもこんなに、ッあん！ かたくなさって、い、痛かったりしませんの？」

丁寧に扱われるおかげで、ペニスが高級品に思えてくるから不思議だ。

ふたりの足つきがだんだんシンクロし、タイツで包まれていくような感覚がする。

「いいよ、その調子……はあ、すごく気持ちいい」

ご主人様は息を乱し、手持ちのカメラまで震わせた。

剥き身の肉棒に甘い痺れがまとわりつき、排出に至りそうな焦燥感も込みあげてくる。反射的に腰がぶるつくたび、亀頭がひくひくする。

「さっきよりピンピンになってない？ ひあっんあ、エッチなかたちだし」

「こんなモノが、へあ、わたくしの……に、んふ、はいつてたなんて」

ネコ耳とヘッドドレスで忠誠を誓ったメイドたちは、猫ならではのポーズをしきりにくねらせた。フリルの可憐さとスクール水着の幼さを豊満な肉体に重ね、男の子を誘うように腰で波打つ。

「やですわ、っあはん、おおっオシリの！ どうやったらとまるんですの？ ひえふう、オシリのあな、かきまわされちゃいますわ！」

喘ぎつつ、亜理紗はバイブを止めようとした。しかしシートを掴んでいなければ快感を堪えきれないらしく、スイッチを切り替える要領を得ない。

にもかかわらず、勃起を抜く足つきは回数をこなすごとに上達していた。玉袋を優しく蹴りあげ、サオをなぞる指遣いがいやらしい。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作・転載・無断複製は厳禁です。著作権者:キルタイムコミュニケーション

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!